

報告書

第7回 BM 子ども相談室 勉強会

開催日時:2022年9月4日(日)3:00-4:30 PM (JST)

講師:内田千春氏(東洋大学教授)

タイトル:複数言語学習者として育つ子どもたちへの支援を考える
一就学前の子どもが育つ「環境」への働きかけ

この勉強会では、主に①複数言語環境で育つ子どもとその家族を支援する際の基本的な考え方、②背景は多様、③多言語環境で育つ子どもの言語発達、④子育ての支援はいつ誰が、という内容でお話頂いたのちに、Padlet を用いてグループ交流と質疑応答を行った。

講義概要:

① 複数言語環境で育つ子どもとその家族を支援する際の基本的な考え方

複数言語環境で育つ子ども達の特徴は「家庭と社会の言語が異なる」「家庭内に複数の言語がある」「社会に複数の言語がある」と明示した上で、日本語支援が必要な外国籍・日本国籍の児童生徒数を棒グラフに示した。道府県別に見ると、外国籍・日本国籍ともに愛知県と神奈川県が多くなっている。また、集団保育ではなぜ文化的摩擦が生まれるのかに関しては、「わたしの当たり前」「日本の当たり前」などが原因であり、「頭を触るのはタブーなのか」「暑くても4月には必ず制服を着ないといけないのか」等といった例を挙げた。佐藤(2012)によると、そのままにしておくとう偏見や差別につながるものの見方・感じ方は「前偏見」である。

② 背景は多様

言語文化的に多様な子どもたちの背景は多様であり、特に乳幼児期の子どもの育ちやニーズ、興味・関心は一人一人異なる。そのため、子どもについて気がついたことを共有したり一緒に考えることも重要であり、多職種・多機関と連携し子育て中の家族を支援していく必要がある。

③ 多言語環境で育つ子どもの言語発達

言葉というのは温かいふれあいの中で身につけていく。そのため、伝えたい人と伝えたいことが必要である。伝えたい人とは家族・保育者・友だちなど信頼関係のある人たちで、伝えたいこと(心が動くこと)とは豊かな体験や身体をくぐった体験(直接体験)である。また言葉とは文化の象徴であり、その文化の価値観を表している。つまり、日本語を学ぶということは、その背景にある日本文化も獲得してい

くということ。さらに、言葉とは自己実現の手段でもあり「わたし」を作る。つまり、自己制御、自己調整に関わっておりアイデンティティの形成をする。

ヒトは2つ以上の言語を同時に習得することが可能である。そしてカミンズ(1984)が2言語共有説で示しているように、母語がしっかり発達している子どもほど、2つ目の言語を取り入れる手がかりをたくさん持っていると言える。

5-8歳の接続期の言語発達では生活言語と学習言語に分ける事ができる。見かけの流暢さや発音だけみて、学習言語も出来ていると考えるのは危険。学校で必要なのは考えるためのことば(思考・概念・認知活動)であり、子どもが話している「内容」やその「複雑さ」も見ていく必要がある。

④ 子育ての支援はいつ誰が

子育て支援で必要なことは、家庭の文化に興味関心を持つこと、子どもと保護者が一緒に楽しめる事を紹介すること、また地域のリソースを探しておくことが挙げられる。園では1対1で子どもと関わり、言葉の力を的確に捉え、そして園生活の中で言葉を育てていくとよい。その際、言葉を育む視点を持つ園の外のサポーターとつながることをお勧めする。例えば、家庭の文化を取り入れたり(母国の絵本・歌・ゲーム等)、伝える・伝えあう経験や機会を増やすとよい。それに加えて、新たな場所で「やってみよう」と思える底力を育てるとよい。そのためには、「助けてくれる人がいる」「失敗しても大丈夫」「ありのままの私でよい」という学びに向かう力と自己肯定感が非常に大切である。最後に、地域連携ネットワークとして、NPO、行政、園、小学校などが接続期の子どもとその保護者の安心のために、日本語教室・放課後教室の提供、情報共有、多言語で書かれた小学校就学ガイドの配布などをしていくことが肝心である。

<グループ討議>

6つのグループに別れて行われた15分ほどの討議では以下のような意見があった。

「学校の担任の先生が、母語が大切だということを十分理解して周りに伝えてくれることが大切」

「保護者への継承語の啓蒙教育が大切だと思う」

「大阪の保育園で複数名のベトナム語家庭にインタビューしたところ、園からは母語で、と伝えられていた」

「浜松では母語の重要性を伝える研修なども行われているようだが、教育委員会管轄の幼稚園には伝わっていても、厚生労働省管轄の保育園には伝わっていないことがある」

参考文献は発表資料(スライド)の最後のページを参照してください。

第7回 BM 子ども相談室勉強会実行委員会

文責:福川美沙

2022年9月12日